

『忘れられた日本人』は今出せるか

1984 年に出版された宮本常一（1907～1981）の『忘れられた日本人』は岩波文庫として最も読まれている本の一つである。日本全国を旅して歩いた一人の民俗学者が著した、名も無き日本人の生き方と人生観についての貴重なドキュメントで、元は 1960 年に未来社から刊行されたものである。本書中、最も印象深いのは「土佐源氏」の一編であろう。これは「ぼくろう」を生業としてきた老人の人生回顧であり、この作品をめぐって幾つもの研究が行われているほどである。

本書を読んで一つ気が付くことがある。それは、このような本は現代の大学の研究者にはもう書けないのではないか、という思いだ。もし宮本常一が大学教授として、いま全く同じ本を出そうとすると、「待った」がかかる恐れがある。曰く、取材先にきちんと掲載許可を取ったのか。曰く、個人が特定される書き方をしていないか。曰く、差別用語や性的描写など不適切な表現を用いていないか。曰く、事実をそのまま書いてフィクションを交えていないか。曰く、引用など学術論文の体裁を守って書いているか等々。これら一連の研究倫理コードを突き付けられたら、宮本常一は筆を折ったかもしれない。なぜなら、『忘れられた日本人』の各編はいずれもこれらのコードに抵触しているからである。とくに名作「土佐源氏」がそうである。そもそも、これは一人語りする老翁の“ライフヒストリー（生活史）”というよりは、宮本常一による“ライフストーリー（人生物語）”、つまり一つの文学作品なのである。

ところで、私の関係する研究分野、例えば宗教社会学では、取材先の宗教者の個人名を匿名化して、A 牧師、B 僧侶、C 教会長などとするようになっている。近年では、A 教会、B 寺、C 分教会などと、所属も匿名化する研究も見られる。やがて、A 教、B 宗、C 教団などと、宗教名も伏せる時代が来るのではないか。取材内容の掲載にすべて先方の許可を必要とすると、取材先に都合の良いことしか書けない論文ばかりが出てくるのではないか。まさか、そんな極端なことにはならないであろうが…。

人文学の研究においては、実名だからこそその重みがある。ある作家や思想家の伝記的研究において、プライベートな部分をすべて匿名にしてぼかして書いたとしてみよう。その場合、これこれの伝記的事実が彼の文学作品や思想形成に大きな影響を与えたと述べても、そうした論述はいつこうに実感を持って迫ってこないだろう。

カフカとキルケゴールの場合

私がなぜこのようなことをことさら述べるかと言うと、カフカやキルケゴールの伝記的研究が念頭にあるからである。

カフカには恋人が 4 人いたと言われ、中には婚約までした女性も 2 人いる（うち 1 人は 2 回も婚約をしている）。結局、彼は誰とも結婚はしなかったが、彼女たちとの交際は彼の作品世界に色濃く影響を残した。彼女たちに宛てた手紙の内、2 人のものが『フェリーツェへの手紙』と『ミレナへの手紙』として刊行されている。もし、恋人たちの名前が A 女、B 女、C 女、D 女だったとしたら、また彼の日記や彼女たちに宛てた手紙が省略だらけだったとしたら、読者はどれだけ興をそがれてしまうことだろう。しかし、幸いにしてそうはならなかった。そも

そも、『審判』や『城』などカフカの名作を我々が今日読めるのは、親友マックス・ブロートの“裏切り”があったからである。カフカは、自分の遺稿作品や日記・ノート類を彼に託し、これらを 2 度までも焼却処分するようにと遺言していた。しかし、ブロートはこれを見捨てて刊行した。彼は親友との約束を守るという友情の倫理よりも、名作を世に伝えるという文学者としての使命感を優先したのである。

一方キルケゴールの場合は、彼自身が独自の人生の使命感を有していた。彼が自らの著作を密かに捧げたのは、レギーネ・オルセンという彼の元婚約者であった。彼がレギーネと婚約したものの、1 年後にそれを一方的に破棄したこと、しかも彼女との関係を連想させるような記述が彼の著作の随所に見受けられることは、同時代の関係者たちにはよく知られていた。当然ながら、キルケゴールの伝記的研究は、この不可解な行動に焦点を当てることになる。

私自身はキルケゴールの一つ一つの作品をそれ自体として丁寧に探究すべきという立場なのであるが、彼の著作活動の解明のためにはやはり伝記的側面にも顧慮する意義があると考えている。彼の死後、膨大な日記が公刊されるに及んで、このレギーネ事件をめぐる伝記的研究も盛んになった。もしこの部分が、単に A 嬢と謎の婚約破棄問題があったなどと曖昧な書き方しかできなかったとすれば、彼の実存を賭した精神生活の解明は隔靴搔痒の感を免れなかっただろう。

学問的良心による精華を見せるとき

言うまでもないことであるが、現在の研究倫理コードは、生身の人間を扱う配慮として、人文学研究においても必要不可欠なものである。このことは銘記しておかなければならない。宮本常一が『忘れられた日本人』を書いた戦後日本社会でもそうだったが、カフカやキルケゴールの時代はそれ以上にそうした配慮が欠如していた。

カフカやキルケゴールは文壇や大学の外部で著作を著したが、彼らもまたその時代的・社会的制約の中で執筆せざるを得なかった。生前、カフカは単に無名であったが、キルケゴールはその晩年、悪質なジャーナリズムの批判にさらされた。著作に関して言えば、カフカの場合、上述のブロートの功績は多大ではあるが、彼はカフカの手稿類を占有し、彼自身の判断による編集や再構成を施していた。ブロート亡き後、大学の研究者らによる丁寧な校訂が行われ、20 年かけて手稿に基づく批判版全集が刊行されたのである。キルケゴールの場合は、死後 20 数年後に彼の日記等が刊行されて、その精神世界の解明がようやく始まり、20 世紀に入って全集が出揃った後、ドイツを中心に注目されるようになった。

しかし、その評価は実存哲学の創始者としての限定付きのものであり、彼自身の思想の全体像の解明は今日に至るまで続いていると言ってよい。そうした解明作業は、現在ではいづれも学問的良心の下で行われ、これこそ研究者による探究の営みの精華を示すものである。ただ単に法令遵守のレベルで受け取られている研究倫理であるが、学問的良心に基づく真理探究こそ大学における本来の研究倫理のあり方だと言えるだろう。